

森鷗外の初期文芸批評における漢文学受容の射程  
(要旨)

広島大学大学院文学研究科  
博士課程後期人文学専攻  
学生番号：D175398  
氏名：王 憶氷

本論文は、鷗外の文芸批評研究と鷗外の漢文学研究という二つの大きな領域の間に埋もれていた、初期の文芸批評における漢文学受容の意義に焦点を当てた研究である。鷗外の初期の批評や随筆で言及された漢文学作品や漢学者を取り上げるとともに、鷗外の蔵書への書入れ、鷗外自身や同時代の作家の言説を調査することにより、鷗外がこれらをどのように理解し、いかなる戦略的意図をもって批評文に取り込んだかを分析している。本論文は、序章と結章を含む全九章により構成される。

序章では、鷗外文学の文芸批評における漢文学について、研究の背景を整理し、初期の批評に登場する漢文学の位置づけと批評の技法を検討することの目的や意義、また関連する先行研究を整理した上で、本論文の研究対象と研究方法を述べる。

第二章では、明治 22 年から執筆が始まる鷗外の文芸批評に着目し、研究の背景として、明治 20 年代前後の日本の文壇における文芸批評や漢文学の状況を概観する。また、鷗外の漢文学の教養の基礎となった、幼少期からの漢学の学習経験を素描する。それらは、鷗外の捉えた漢文学の射程をはかる手がかりとなるものであると考える。

第三章では、鷗外の「現代諸家の小説論を読む」に引用された中国の小説の三作品を中心に、それらの役割について考察する。この批評は小説を体系的に論じたものであり、文中に『虞初新誌』、『石點頭』、『水滸伝』の原文が一部引用されている。その取り込み方を分析した結果、同時代の作家である坪内逍遙と夏目漱石の場合に比べ、鷗外には漢文学を現実の社会問題と関連付けることへの関心が薄く、文芸の世界と現実の世界とを分離して見る傾向が認められる。また、漱石の懐疑的な姿勢とは対照的に、鷗外の場合、全般的に漢文学に対して、柔軟に受けとめる姿勢を見せている。このことは、彼の幼少年期から育まれた漢文学の素養のあり方が関係していると考えられる。

蔵書の書入れを確認すれば、「現代諸家の小説論を読む」に引用された三作品を鷗外が実際に読んだのは、ドイツ留学前であったことが分かる。つまり、批評の執筆時点から時を隔て、過去に読んだ作品をここで引用したということになる。以上により、鷗外の懐古的な趣味と回想的な引用の技法が読み取れる。また、「現代諸家の小説論を読む」では、漢文学作品の原文を複数回、巧みに引用しながら持論を展開していることが注目される。これは、和漢の古典文学で多用される引喩の手法から影響を受けていたことをうかがわせるものである。

第四章では、鷗外の「明治二十二年批評家の詩眼」に言及された、明代の詩人・李攀龍及び宋代の文人・陳俊卿の言説、宋代の費袞による筆記『梁谿漫志』の引用を主に取り上げる。これらの作品の扱い方から、鷗外においては、批評の実質的な内容に入る前に、序論や挙例の部分において修辭的に文学作品を引用するという特徴が見出せる。また、本批評では、当時活躍していた批評家の石橋忍月や内田魯庵についても述べられているが、実際に彼らの文章と比較す

れば、中国の明清時代の文学に対する鷗外の関心の高さがうかがえる。

さらに、鷗外の蔵書の『梁谿漫志』に残された数多い書入れには、四六、詩想、美の独立といった、明治 20 年代初期の批評文のキーワードが多数用いられていることが分かる。それにより、これらの書入れが、ドイツ留学からの帰国後に施されたものであろうと推定される。また、これらの内容には、学生時代の読書経験から習得したと思われる、漢語や医学関連の用語への関心も反映されている。こうした留学前の読書経験から得た知識を保ちつつも、留学後は西洋の審美学に基づく新たなまなざしで書かれた批評があらわれるようになり、西洋文学を基準として中国古典文学を読む姿勢へと変化していく様子が見られる。

第五章では、鷗外が初めて翻訳というジャンルを中心に論じた批評「聊齋志異の翻訳」に着目し、古典の翻訳と読解の傾向について考察する。この文章を通して鷗外は、『聊齋志異』の翻訳や、その翻訳に対する同時代の評価には、独自の創作と翻訳というジャンルに対する認識上の混同が読み取れることを、明快に指摘する。その上で、このような傾向に異を唱え、評価の線引きを唱えようとしたのである。

鷗外文庫所蔵本の書入れを確認する限りにおいて、『聊齋志異』に向ける鷗外の関心は、狐、鬼、仙女等が暮らす異類の世界を人間の男性が訪ねるというプロットにあったことが分かる。また、異世界の男女の出会いという話型は、鷗外の短篇小説「舞姫」（明治 23 年）との共通性を示唆するものであるとも考えられる。『聊齋志異』の多彩多様な話を、鷗外が「舞姫」を構想するための参考にした可能性も指摘できよう。

第六章では、鷗外の文芸批評に援用された清代の学者・紀昀の文言志怪小説『槐西雜誌』を手がかりとして、鷗外の志怪小説集における関心の所在を検討する。「しがらみ草紙」の本領を論ず」では、『槐西雜誌』の引用を含め、難解な漢語、歴史的典故といった漢文的な表現が多用されている。また、鷗外手沢本の『槐西雜誌』には、難解な漢字、漢語の字音、意味に対する注釈等の多数の書入れが、全書にわたって確認される。この背景には、紀昀が提唱した学問の方法である考証学が清で流行したことを受けて、当時の日本の漢文学もまたその影響下にあったという状況が関わっていると考えられる。

こうした中で、幼少期から漢文の經典を通じて漢学の啓蒙的教育を受けた鷗外は、考証的な態度で、清代の学者による志怪小説を読んでいたと考えられる。書入れには、鷗外が漢学の難解さに愉悦と達成感を感じている節もあり、反復される漢学的表現には、鷗外のある種の権威的で古典的な懐古趣味と高踏的な情緒が託されたものだと見られる。よって、「しがらみ草紙」の本領を論ず」において、自ら創刊した雑誌の主旨を高らかに宣言する時、鷗外は漢文学を権威あるものと見なし、その威光を借りるようにして漢学的な表現を多用したのである。

第七章では、鷗外の批評文における『氷川詩式』援用の方法と読解を分析し

た上で、それが持つ意味と、鷗外の批評での東洋詩話の位置づけを考察する。『氷川詩式』の多くの内容を収録した鷗外の「詩学材料」からは、西洋の詩学の原理を摂取した鷗外が、それに依拠しながら同じく詩について論じた東洋の詩話を読み直すことで、漢文学を再認識、再発見した様子が読み取れる。

この批評では、鷗外が東洋の詩話に対して、作詩の方法論的な部分よりも、むしろその世界観に注目していることが確認される。他方で、原理的な概念を比喩的に解釈する等、東洋の詩話の言説で西洋の詩学の理論的な空白部分を補充するといった戦略的な意図もうかがえる。このように鷗外は、東洋の詩話文則を媒介として西洋の詩論を理解し、同時に西洋の理論を経て東洋の詩学を再認識したのである。こうした理解の有り様が、初期の文芸批評に反映されていたと考えられる。鷗外が文芸批評において、詩話文則を絶対的基準としては否定しながらも、知的な表現力という面でそれを拠り所として議論を展開したのは、そのあらわれであろう。

第八章では、矢野龍溪の随筆集『想起録』の数篇に対して書かれた鷗外の「想起録」を中心に、漢文体の考証随筆を援用した鷗外の批評の手法を分析する。鷗外は、龍溪の随筆に対し、多数の資料を用いて考証を行った。その際、江戸の漢学者西島蘭溪『慎夏漫筆』や、村瀬栲亭『秣苑日涉』から文章を引用し、またそこで言及された漢籍を二次的に転用している。このように、一つの話題に対して、ほかにも関連する典籍の記述を集めながら、随筆の内容をより多くの資料によって考証しようとしたのである。

漢文考証随筆の書入れからも、同様の読書習慣が見出せる。このような読書のあり方は、学問のために学問をするという観念を持ち合わせていた鷗外に、日常的な安定感を与えていたのではないかと考えられる。書入れの内容から、鷗外が漢文体の考証随筆を読んだのは、大学卒業後から陸軍省入省までの間であるということが分かる。鷗外が身の振り方が定まらない状況の中で、内面の安定を求めて漢文の考証に注目していたのではないかと推測される。

結章では、結論について述べる。以上の各章において、鷗外の蔵書に残された読書記録から、鷗外が漢文の術語や表現に興味を持っていたことが看取される。言葉そのものの意味の把握や考証のほか、鷗外は作品の出典や歴史的事象、事物の名称等についての考証にも、高い関心を示している。また、奇談、異聞や恋愛物語等に関する感想、さらには教訓的な内容に共感するような書入れも散見される。

そして、鷗外が初期文芸批評で援用した漢文学のジャンルは、同一の文章において、言及した西洋文学のジャンルに応じて変わるという傾向が一貫して確認される。漢文学と西洋文学は、初期の文芸批評において両輪の関係にあると見てよいだろう。また、漢文学を援用する方法を各章にわたって分析した結果、初期文芸批評では、漢文学の作品を修辭的に用いるという特徴も指摘できる。このような鷗外の批評の技法は、古典的漢文の修辭法の一つである比興に通底するものでありと推測される。青少年期以来、鷗外が自己表現の方法として

修辭的な漢文学の借用に拘泥したことが、理由の一つとして挙げられよう。鷗外は漢文学を含めて知的素養を培い、自身の教養を形成しながら、自己を表現する言葉を獲得していったと見られる。初期の文芸批評の段階では、西洋の詩学に基づく近代の批評の理念を、漢文学の読解を媒介項として解釈していたと考えられる。

また、鷗外の初期文芸批評には、明治の文化が近代化の要請に直面したことによる、漢文学に対する矛盾した態度が見られる。東洋の詩話文則を文芸批評の唯一の標準とする状況を排斥しつつ、他方で漢文学の作品を多数援用している。明治初期は新旧の文物が交代する時期であったと言われる。そのような新旧の交代は、一般的に長い時間の経過のうちに成立していくものであるが、個人においては、自己の成長した環境において蓄積した古いものを基礎として、新しいものを取り入れることになる。そうした傾向が、鷗外においても確認できるのである。

本論文では、鷗外の漢文学を読解する姿勢や、その援用方法を中心に、鷗外の初期の文芸批評における漢文学の意義を検討した。これは鷗外文学における漢文学の摂取の問題のみならず、明治初期という転換期の文学に存在した、伝統と革新をめぐる問題にもつながっていくと考えられる。